

● 井内 真帆 特定准教授

Maho IUCHI (Associate Professor)

研究課題: 「チベット文化圏の基盤解明のための総合的研究
- 中世チベット仏教伝播後期について -」

(Elucidation of the foundations of Tibetan cultural area: On medieval
Tibet and the second diffusion of Buddhism in Tibet)

専門分野: チベット学、チベット史 (Tibetan Studies, History of Tibet)

受入先部局: 文学研究科 (Graduate School of Letters)

前職の機関名: 日本学術振興会

(Japan Society for the Promotion of Science)



チベット文化圏とはチベット文字とチベット仏教を共通項とする文化圏で、中でもチベット仏教の広がりチベットの範囲を超える広いものです。私が研究対象とするのは、このチベット文化圏の重要な要素であるチベット仏教の基礎が作られた時代で、チベットの中世の始まりの時期 (10世紀から13世紀頃まで) です。この時期はチベットにおいてサンスクリット語からチベット語に膨大な数の経典が翻訳され、カダム派やカギユ派、サキヤ派などチベット独自の宗派が成立するなどしたことから「チベットのルネッサンス」と呼ばれます。しかしながら、この時代について書かれている同時代史料は他の時代であれば漢語史料やモンゴル語史料、満州語史料があるのに対し、それらがほとんどないということと、チベット語の同時代史料にも限りがあるということから、「チベット史の空白」とされてきました。私の研究はこの「チベット史の空白」をここ最近15年ほどの間にチベット本土から新たに発見されたチベット語の写本文献と現地でのフィールド調査によって明らかにしようとするものです。

Tibetan cultural area comprises Tibetan script and Tibetan Buddhism. Tibetan Buddhism, in particular, spreads much wider than the scope of Tibet. My research focuses on Tibetan Buddhism at the beginning of the Middle Ages in Tibet (from the tenth to the thirteenth century), which was the foundation period for Tibetan cultural area. This period is called as the “Tibetan Renaissance” by modern scholar because of the many *sutras* that were translated from Sanskrit to Tibetan at this time and the consequent establishment of Tibetan Buddhist schools, such as the Kadam, Kagyu, and Sakya. However, because of the lack of contemporary historic materials on this period, this time is also known as a “period of fragmentation.” Therefore, my research seeks to clarify this “period of fragmentation” using relevant, newly discovered Tibetan manuscripts and field research in Tibet.

チベット文化圏とは?

伝統的なチベット文化圏は、中国の行政区分でいう現在のチベット自治区だけでなく、四川省、青海省、甘粛省、雲南省の一部にまで広がり、ブータンやネパール、インド北部のヒマラヤ地域、パキスタンの一部、さらにはチベット仏教を信仰する地域も含めると、モンゴルやブリヤート、カルムキアをも含みます。「伝統的な」という言葉を付けたのは、現在もチベット人が住む地域あるいはチベット仏教の影響を受ける範囲は拡大し続けているからで、1959年のダライ・ラマ14世

のインド亡命を契機に多くのチベット人が難民としてインドへ逃れ、その後、北米やヨーロッパ、オーストラリアへと移住しました。また、14世以外のチベット仏教の指導者たちも世界へ渡ったことで各地で現地の信者を獲得して世界中にチベット仏教が広がっていきました。

4つの新出文献群に対する文献学的研究

では、このようなチベット文化圏の基礎、特に文化圏の重要な構成要素であるチベット仏教の基礎がいつ作ら

れたかということですが、それが私が研究対象とするチベットの中世初期あるいはインドから仏教が伝わった後半と呼ばれる時期（前半はチベット帝国時代）です。この時代にカダム派をはじめとするチベット仏教独自の宗派が成立するなど、現代まで続くチベット仏教の基礎が作られました。しかしながら、この時代は地方豪族が割拠する時代で、古代チベット帝国（7-9世紀）や後のダライ・ラマ政権（17-20世紀初頭）などの統一した権力が不在から、政治的には「分裂期」と呼ばれ、また同時代に書かれた文献が少ないことからこれまで「チベット史の空白」とされてきました。

しかしながら、このような状況はここ15年程の間に主にチベット本土より同時代に関する膨大な数の新出文献が発見されたことで一変しました。私の研究ではこの最近になって付け加えられた新出文献のうち——（1）ダライ・ラマ5世秘蔵書、（2）ポカラ宮殿所蔵文献、（3）カラホト（黒水城）文献、（4）ブリ文献——の4つの文献群（図1）の全体像を解明し、さらに個別の文献に対する研究と比較研究を行います。これらの文献は全てチベット文字で書かれた手書きの写本文献で、出土地や経緯は異なりますが、写本の書体や形態、さらには内容においても多くの類似点が見られるものです。具体的には、写本文献から新たに明らかになる歴史的記述の整理と検証、写本文献の書体とクニイクと呼ばれる省略文字のデータベースの作成、4つの文献群に共通する特徴的な内容（儀礼文献など）について研究を行いたいと思います（図2）。

チベット語文献を取り巻く現状調査

また、私の研究にはもう一つの目的があり、それはチベット語文献を取り巻く現状調査です。上で述べたように、現在、チベット本土では上記のようなチベット語写本が大量に発見され、写本研究が大変盛り上がりつつありますが、その中心を担っているのはチベット人自身です。本研究では現地でも写本文献の出版状況などを調査すると同時に、さらに写本の収集や編纂、出版に携わるチベット人研究者や僧侶／尼僧について調査をしてチベット人自身の歴史認識や民族文化のあり方を考察します。文化の当事者であり後継者でもあるチベッ

ト人自身の活動について調査と記録を行うことは、まさに変容の過渡期にあるチベット文化の軌跡を記録するためにも極めて重要であると考えます。



図1 4つの新出文献群とその出土地、著者作成。

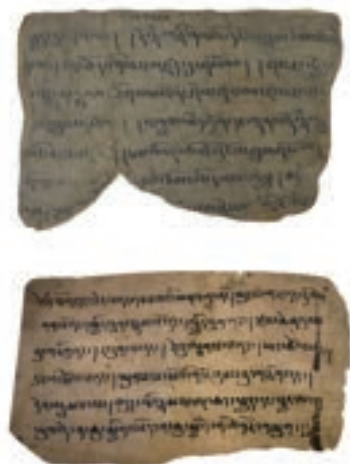


図2 カラホトとブリから出土した儀礼文献の例。
Cf. 写本(上) Tsuguhito Takeuchi and Maho Iuchi, *Tibetan Texts from Khara-khoto in the Stein Collection of the British Library*, Toyo Bunko, 2016, cat no.109. 写本(下) 西藏大学蔵文古籍研究所(編)『普日文献』西藏蔵文古籍出版社, 2018, cat no.137.

参考文献

[1] 井内真帆「皇帝家の失墜と仏教復興」岩尾一史、池田巧(編)『チベットの歴史と社会』(上) 京都:臨川書店、28-49 (2021).

[2] Maho Iuchi, *An Early Text on the History of Rwa sgreng Monastery: The Rgyal ba'i dben gnas rwa sgreng gi bshad pa nyi ma'i 'od zer of 'Brom shes rab me lce*, Harvard Oriental Series, vol. 82, Harvard University Press, Cambridge MA/London UK (2016).

[3] Tsuguhito Takeuchi and Maho Iuchi, *Tibetan Texts from Khara-khoto in the Stein Collection of the British Library*, Toyo Bunko, Tokyo (2016).